

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第78集



ふきの
柗野第1遺跡

県営広域営農団地農道整備事業島北部2期地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県立文化財センター発掘調査報告書 第78巻
 『発掘第1遺跡』正 表

ページ番号	正	裏
p17 扉裏		
p12 13-14行		裏
p13	このうち最小径は35の...最大径は39の...	このうち最小径は31の...最大径は39の...
p16	遺物番号47の裏の25	裏
p28 調査者 発掘作業日誌	西暦2003年 月 日	西暦2003年10月17日

序

宮崎県教育委員会では、県営広域営農団地農道整備事業霧島北部2期地区の建設に伴い、平成11年度に宮崎県農政水産部西諸県農林振興局の依頼を受け、終野第1遺跡の発掘調査を実施いたしました。

本遺跡のある浜川原地区はえびの市の南西、霧島連山の裾野に位置し、丘陵を川が浸食して谷を形成しており、丘陵部には遺跡が点在しています。

今回の発掘調査によって終野第1遺跡からは弥生時代の竪穴住居跡、縄文時代の集石遺構や土坑が検出されました。特にアカホヤ火山灰層の下からは縄文時代早期の角筒土器をはじめ黒曜石製の石鏃等が出土し、宮崎県内における黒曜石の流通や類例の少ない角筒土器の様相の一端が明らかになるなど貴重な資料を得ることが出来ました。

本書が学術資料として、あるいは学校教育や生涯教育の資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する認識や理解を深めるための一助となることを期待します。

最後になりましたが、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導御助言をいただいた諸先生方、ならびに地元の皆様方に心より厚く御礼申し上げます。

平成15年9月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 米良弘康

例 言

- 1 本書は、県営広域営農団地農道整備事業高北部2期地区に伴い、宮崎県埋蔵文化財センターが平成11年12月7日より平成12年3月31日まで実施したえびの市大字東長江浦1482番地他所在の柘野第1遺跡の調査報告書である。
- 2 本調査は、宮崎県農林水産部西諸県農林振興局の依頼により宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 現地の実測・写真等の記録は柳田宏一・下田代清海が行った。
- 4 空中写真については(株)九州航空に、自然科学分析については(株)古環境研究所に、グリッド杭設置については(有)脇元測量に、石器実測・トレースの一部については(有)九州文化財リサーチに委託した。
- 5 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、図面作成・遺物実測・トレースは柳田が行い整理作業員が補助をした。
- 6 本書に掲載した地図はえびの市教育委員会発行の遺跡詳細分布図を使用した。
- 7 土層断面及び土器の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に拠った。
- 8 本書で使用した方位は座標北と磁北である。座標は国土座標第Ⅱ系に拠る。レベルは海拔絶対高である。
- 9 本書で使用した遺構略号は次の通りである。
SA…堅穴住居跡 SC…土坑 SI…集石遺構
- 10 本書の執筆及び編集は、柳田が担当した。
- 11 出土遺物その他諸記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第I章 はじめに	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 位置と環境	3
第II章 調査の記録	3
第1節 縄文時代の遺構と遺物	4
(1) 遺構	4
(2) 遺物	8
第2節 弥生時代の遺構と遺物	21
(1) 遺構	21
(2) 遺物	22
第3節 自然科学分析	24
第4節 まとめ	24

挿図目次

第1図 柁野第1遺跡位置図	2
第2図 基本土層図	3
第3図 遺構分析及び第IX層上面コンター図(A1区)	4
第4図 B区第IX層上面コンター図	5
第5図 土坑実測図1	6
第6図 土坑実測図2	7
第7図 集石遺構実測図	8
第8図 縄文土器実測図1	11
第9図 縄文土器実測図2	12
第10図 縄文時代の石器実測図1	14
第11図 縄文時代の石器実測図2	15
第12図 縄文時代の石器実測図3	16
第13図 縄文時代の石器実測図4	17
第14図 縄文時代の石器実測図5	18
第15図 縄文時代の石器実測図6	19
第16図 竪穴住居跡実測図	21
第17図 弥生土器実測図	22

表 目 次

表 1	遺物觀察表 (繩文土器)	10
表 2	石器計測表	19
表 3	遺物觀察表 (弥生土器)	23
表 4	石器計測表 2	23
表 5	報告書抄録	33

図 版 目 次

図版 1	遺 構	25
図版 2	遺物写真 (繩文土器)	26
図版 3	遺物写真 (石器)	27

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

柗野第 1 遺跡は、えびの市東長江浦に広がる遺跡で、宮崎県西諸県農林振興局の広域営農田地農道整備事業髙北部 2 期地区に伴う調査である。

本遺跡はえびの市教育委員会発行の市内遺跡詳細分布図に掲載（遺跡番号 3048）されている周知の遺跡である。この遺跡内を広域農道を通す計画となり、路線が遺跡にかかる部分の取扱について西諸県農林振興局と県文化課との間で協議が行われた。

その結果、周知の遺跡にかかる予定路線対象地の確認調査を行い、今後の遺跡の取扱について協議することとなった。県文化課が平成 9 年度に東側の畑地部分（A 区）を、平成 10 年度に西側の丘陵部分（B 区）の確認調査を行った。調査の結果、A 区では弥生時代の竪穴住居跡及び遺物が、B 区では縄文早期の土器片が検出されたので出土した部分を中心に本調査を行うこととなった。平成 11 年 12 月 7 日に調査を開始し、平成 12 年 3 月 31 日に現場での調査を終了した。

出土遺物の整理については平成 14・15 年度に宮崎県埋蔵文化財センターで行った。

第 2 節 調査の組織

柗野第 1 遺跡の発掘調査・整理作業・報告書作成については下記の体制で実施した。

	平成 11 年度 (発掘調査)	平成 14 年度 (整理作業)	平成 15 年度 (報告書作成)
宮崎県埋蔵文化財センター			
所 長	田中 守	米良弘康	米良弘康
副 所 長	江口 京子		
副所長兼総務課長		大藪 和博	大藪 和博
副所長兼調査第二課長		岩永 哲夫	岩永 哲夫
庶 務 係 長	児玉 和昭		
総務課総務係長		野邊 文博	石川 恵史
調査第二係長（調整）	青山 尚友		
調査第二課調査第三係長（調整）		菅付 和樹	菅付 和樹
調査第二係主査（調査担当）	柳田 宏一		
調査第二課調査第四係主査		柳田 宏一	柳田 宏一
調査第二係調査員（調査担当）	下田代清海		



第1図 柗野第1遺跡位置図 (S=1/25,000)

第3節 位置と環境

終野第1遺跡のあるえびの市は、宮崎県西部に位置する。中心部は九州山地と霧島連山に囲まれた盆地であり、周辺部は山地が広がる。北西は熊本県、南東は鹿児島県に接し、東側は小林市に隣接する。古来より熊本、鹿児島へ通じる交通の要衝であり、江戸時代には薩摩藩の関所が置かれていた。

本遺跡は市の南西部、東長江浦地区にあり、霧島山麓の台地上にある。近辺は山麓から盆地中央に向かって川内川の支流の千代反田川や白鳥川が南から北に流れ、流域の両側に遺跡が点在する。調査区の北西側には谷が走っており、南側は霧島山から北に向かって緩やかに台地が傾斜し、畑地が広がっている。本遺跡はこの台地の北端に近い位置にあり、前述の両河川に挟まれた場所に位置する。

周辺には浜川原遺跡、内丸遺跡、赤坂遺跡等があり、最も近い段丘下の浜川原遺跡では縄文時代の石器製作跡や古墳時代の竪穴住居跡などが検出されている。

本遺跡では弥生時代の遺構、縄文時代早期の遺構・遺物が確認されたが、縄文時代早期についてはえびの市内の遺跡では調査例が少ない。九州自動車道関連の調査で前畑遺跡、灰塚遺跡でそれぞれ押型土器が数点出土している。野久首遺跡では平格式土器が数点、近年ではえびの市教育委員会が調査した後平第2遺跡から押型文、捺糸文、沈線文、塞ノ神式土器などが出土しているが、いずれの遺跡も出土量は少ない。早期の土器が大量に出土したのは妙見遺跡で、前平式・短甕式土器等の貝殻痕文系の土器や押型文、塞ノ神式や手向山式土器が出土している。

基本土層は左の第2図に示したとおりである。第I層の表土は黒褐色の耕作土である。第II層は弥生時代の遺物の包含層であるが、数年前までゴボウ栽培の畑であって第IV層途中まで、所によっては第VI層まで茶盤の目状に深耕されており、包含されていた遺物は粉砕されているものが多かった。

III層はIV層のアカホヤ火山灰の風化した層で、IV層がその本体であるが、IV層下部にアカホヤ火山灰に伴う豆石が顕著にみられたので、これをV層として分けた。VI層は黒褐色の非常に固い、牛ノ厩火山灰の層である。VII層・VIII層は縄文時代早期の遺物の包含層である。赤褐色の桜島薩摩火山灰がまばらに混入しており、明暗の違いで2層に分けた。

調査はIX層上面までで、X層から下は土層確認のためのトレンチを入れた結果である。本遺跡は霧島火山の山麓のため火山灰や軽石の堆積が多様でありこれについては第2章第3節の自然科学分析の結果を参照されたい。

I層	10cm	表土
II層	10cm	黒色土
III層	20cm	二次アカホヤ火山灰
IV層	20cm	アカホヤ火山灰
V層	5cm	アカホヤ火山灰に伴う豆石
VI層	5cm	牛ノ厩火山灰
VII層	10cm	明褐色土(小林スコリア混入)
VIII層	10cm	黒褐色土(小林スコリア混入)
IX層	20cm	褐色土
X層	10cm	灰褐色土
X I層	5cm	明褐色土層(スコリア混入)
X II層	15cm	明褐色土層(スコリア混入)
X III層	10cm	スコリア堆積層
X IV層		灰色土層

第2図 基本土層図

第II章 調査の記録

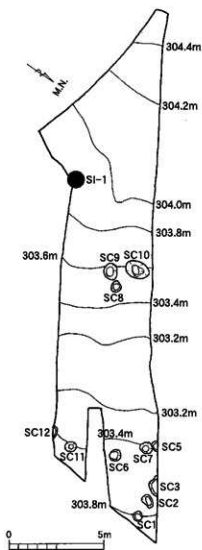
A区のほぼ中央を横切る農道から東側をA1区、西側をA2区とし調査はA区から始め、第I層の表土を重機を使って剥ぎ取り、第II層は人力で掘り進めた。この層は幅30cmくらいの間隔で縦横にゴボウ

トレンチャーによって攪乱されており、遺構・遺物がかなり破壊されていた。この層から弥生時代の土器片と方形プランの竪穴住居跡を検出した。

文化課の試掘の段階で確認された文化層はこの第Ⅱ層のみであったが、調査途中で下の層の確認のためのトレンチを数カ所入れたところ、黒曜石の剥片や縄文時代早期の土器片が検出されたため、アカホヤ火山灰の下の層も調査することになった。

アカホヤ火山灰とその下の第Ⅶ層の牛ノ脛火山灰層を手掘り掘り下げた結果、直下の褐色土層より、縄文時代早期の遺構と遺物が検出された。遺構は土坑が12基と集石遺構1基が検出された。土坑はほとんどがA1区にあり、集石遺構もA1区で検出された。

B区は農道脇から急激に立ち上がる丘で、東側裾部は試掘段階で縄文早期の土器が検出されたが、土の堆積が薄く、岩が露呈している部分もあった。表土の下はすぐにアカホヤ火山灰で、その下は褐色土の層となっていた。平坦部は僅かではほとんどは傾斜地であり、遺物・遺構はほとんど検出されなかった。



第3図 遺構分布及び第Ⅸ層上面
コンター図 (A1区)

第1節 縄文時代の遺構と遺物

弥生時代の文化層の調査中に調査区内数カ所でアカホヤ火山灰の下の状態を調べるためにトレンチを入れた。その結果、A区の数箇所のトレンチから縄文時代早期の土器片や黒曜石のチップ等が検出され、縄文早期の文化層があることが判明した。

アカホヤ火山灰上面での遺構の調査後、手掘りでアカホヤ火山灰層及び牛ノ脛火山灰層を除去した。Ⅶ層を掘り下げたところ、この層中より土器片や黒曜石製の土織やチップが多数出土した。遺構としては集石遺構1基、土坑12基が検出された。遺構・遺物は、丘陵のテラス部分にあたる調査区の東側に集中している。(図3参照)

(1) 遺構

1号土坑 (SC1)

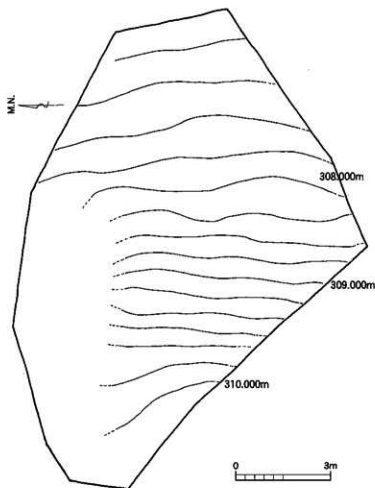
ほぼ円形の土坑で、検出面からの深さ約30cm、底は鍋底状であるが、多少凹凸がある。一部が木根で攪乱を受けている。埋土は自然に堆積して埋まったものと思われる。

2号土坑 (SC2)

中央がくびれた長円形の土坑で、検出面からの深さは約55cmである。底は鍋底状で傾いた状態で検出された。埋土は自然に堆積して埋まったものと思われる。一部に木根による攪乱が見られる。

3号土坑 (SC3)

調査区壁際で検出された土坑で、約半分が調査区外にある。平面的な形はいびつな円形であるが、底は鍋底状で平らである。検出面から底面まで約1mある。検出面から上は牛ノ



第4図 B区第Ⅸ層上面コンター図 (S=1:150)

煙火山灰層によって覆われており、縄文早期の土坑であると考えられる。

4号土坑 (SC4)

調査区際際で検出された土坑で、約4分の1が調査区外の道路の下である。底は鍋底状で、検出面からの深さは最深部で約30cm、浅い所で約20cmとやや傾いている。この土坑だけはA2区で検出された。

5号土坑 (SC5)

これも調査区際際で検出された土坑で、検出部分は全体の4分の1程度かと思われる。掘り込みは直角に近い角度で、検出面からの深さは約70cmある。底は鍋底状である。

6号土坑 (SC6)

円形に近い土坑で、検出面からの深さは約70cmある。底は掘り鉢状であるが、底に近い部分に水平な段がある。

7号土坑 (SC7)

ほぼ円形の土坑で断面も半円状であり、検出面からの深さは最深部は約40cmある。埋土は均一で層を成していない。

8号土坑 (SC8)

7号土坑と平面的な形、大きさは似通っているが、断面はバケツ形で底部は鍋底状になっている。検出面から底部までの深さは約50cmである。

9号土坑 (SC9)

検出面は円形の大型の土坑で底部は緩やかな掘り鉢状であるが、途中で2段の変化点がある。最深部は検出面から約165cmある。埋土の堆積は凹レンズ状になっており、自然に埋まったものと思われる。

10号土坑 (SC10)

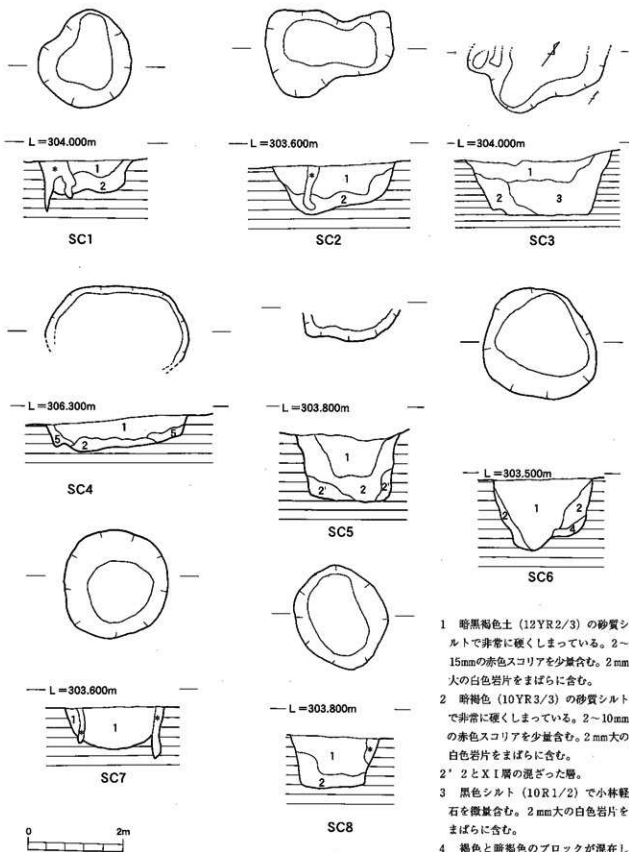
9号と同じく大型の土坑である。検出時の平面形は楕円で、断面は掘り鉢形が彎曲した形である。途中に棚状の段があり、そこから斜めに延びている。検出面から底面までの深さは約150cmである。

11号土坑 (SC11)

検出面で直径50cm前後の土坑でボウル状の断面をしている。埋土は凹レンズ状に堆積しており、自然に埋まったものかと思われる。検出面からの深さは約40cmである。

12号土坑

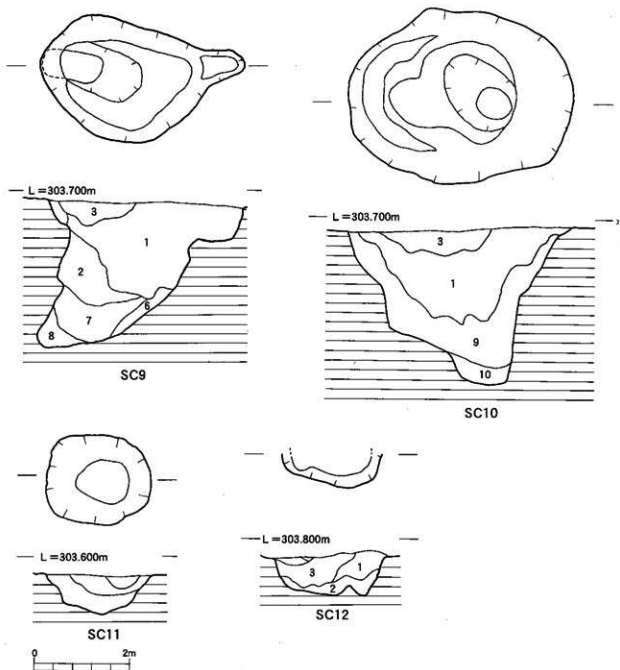
検出面の直径50cm前後の土坑でボウル状の断面をしている。埋土は凹レンズ状に堆積しており自然に埋まったものかと思われる。検出面からの深さは約40cmである。



第5図 土坑実測図1 (S=1/40)

- 1 暗黒褐色土 (12YR2/3) の砂質シルトで非常に硬くしまっている。2~15mmの赤色スコリアを少量含む。2mm大の白色岩片をまばらに含む。
- 2 暗褐色 (10YR3/3) の砂質シルトで非常に硬くしまっている。2~10mmの赤色スコリアを少量含む。2mm大の白色岩片をまばらに含む。
- 2' 2とX I層の混ざった層。
- 3 黒色シルト (10R1/2) で小林軽石を微量含む。2mm大の白色岩片をまばらに含む。
- 4 褐色と暗褐色のブロックが混在した層。
- 5 明褐色の砂質土で2mm大の炭化物を余体にまばらに含む。

* 木根

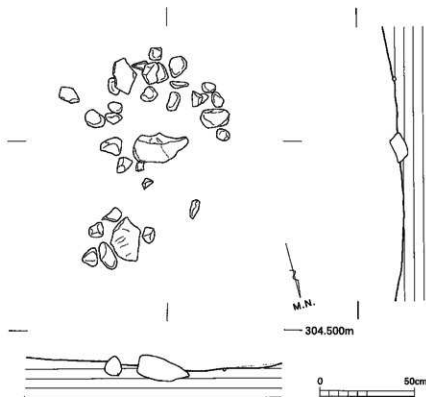


- 1 暗黒褐色土 (12YR2/3) 砂質シルトで非常に硬くしまっている。2~15mmの赤色スコリアを少量含む。2mm大の白色岩片をまばらに含む。
- 2 暗褐色土 (10YR3/3) の砂質シルトで非常に硬くしまっている。2~10mmの赤色スコリアを少量含む。2mm大の白色岩片をまばらに含む。
- 2' 2とX I層の混ざった層。
- 3 黒色シルト (10R1/2) で小林軽石を微量含む。2mm大の白色岩片をまばらに含む。
- 4 褐色と暗褐色のブロックが混在した層。
- 5 明褐色の砂質土で2mm大の炭化物を全体にまばらに含む。
- * 木根
- 6 暗褐色のシルトと褐色シルトの混ざった土で硬くしまっている。壁の崩落土？
- 7 基本的には2と同じだが赤色スコリアの量が2に比べて少ない。硬くしまっており2~4mmの黄色バミス微量含む。
- 8 暗褐色砂質土で柔らかい。2~5mmの赤色スコリアを微量含む。
- 9 黒褐色シルトと褐色シルトの混ざった層で2~20mmの赤色スコリアを多量に含む。下方ほどその量が多い。
- 10 黒褐色砂質土で2~10mmの赤色スコリアを多量に含む。他の層に比べるとやや柔らかい。

第6図 土坑実測図2 (S=1/40)

1号集石遺構 (S I 1)

本遺跡からは集石遺構が1基検出された。A1区東側に位置し、台地の端部にあたる。牛ノ脛火山灰層の下の褐色土層(第Ⅵ層)にあり、やや浅く掘り込まれている。礫の散布はあまり密ではなく、30点あまりである。上部が直上までゴボウトレンチャーによる削平を受けており、底部付近の比較的大きな石だけが残っているものと思われる。また、壁際で検出されたため、調査区外に遺構が広がっている可能性がある。



第7図 集石遺構実測図 (S = 1/20)

(2) 遺物

①縄文時代の土器

終野第1遺跡では、アカホヤ火山灰の下の黒色土層より縄文時代早期の土器及び石器を検出した。牛ノ脛火山灰層直下のⅥ層から縄文早期の無文の波状口縁を持つ土器片が出土し、さらに下のⅦ層からは貝殻条痕文系の土器が出土した。

縄文土器はいずれも細片であったため図化の可能な17点を掲載した。

文様や器形・成形法の特徴などから次の4類に分類した。

I類 外面上部、口縁部付近にのみ文様が施され、下部は無文の胴部となるもの。器形は、口縁部が直口またはやや外反したバケツ状の深鉢形を呈すると考えられる。施文法により2類に細分できる。

- a 施文具を横位に刺突したもの(1, 2, 4)
- b 二枚貝と思われる施文具による横方向の条痕文を施したもの(3)

Ⅱ類 外面に貝殻腹縁によると思われる施文が全面施される深鉢形土器。器壁は内面をケズリ等により比較的薄手に成形しており、角筒形（5～8）と円筒形（10, 11）が見られる。外器面は、斜方向の浅い貝殻条痕文の上に刺突による施文が見られ、口縁部付近に楔形突帯文が、底部付近には、ヘラ状工具によると思われる縦位の細刻線が施される。

Ⅲ類 わずか1点のみであるが、外面に捺糸文が施される土器（9）。器形は壺形土器と考えられる。

Ⅳ類 口縁部が波状口縁を呈する深鉢形土器と考えられる無文土器（12～17）。内外面ともにナデ調整。胴部以下は器形が不明である。

以上の縄文早期の土器は、調査区全体から出土しているが、特にA1区の中央付近と東端付近に土器片が密に出土する。これは土坑の分布と重なっており何らかの関連があるものと思われる。

出土する土層は第Ⅶ層、第Ⅷ層から一部第Ⅵ層の牛ノ厓火山灰層の中から出土するものもある。

出土土器はⅦ層（一部Ⅵ層）に無文の波状口縁を有するもの（Ⅳ類）、Ⅶ層に貝殻条痕文系のもの（Ⅰ類・Ⅱ類）が検出され、押型文を有する土器は1点もなかった。これはえびの市内の他の遺跡の多くが押型文土器片しか出土していないのと趣を異にしている。

Ⅳ類の波状口縁を持つ12, 13, 14などは口縁部形状がわずかに肥厚しており平袴式の特徴に類似しているが、無文の土器である。Ⅱ類の5の角筒土器や10の円筒土器は胴部に縦位の楔形突帯および連続刺突文を有しており、知覧式土器の特徴を備えている。また、口縁部に貝殻条痕が認められるが、胴部には条痕の見られない中原式土器のⅣ型と同じ特徴を有する土器片Ⅰb類（3）も1点出土したが、逆にⅠa類は貝殻条痕を持つⅣ類土器は1点も認められなかった。また、波状口縁を持つ土器には貝殻条痕を施文したものは認められず、すべて無文であった。

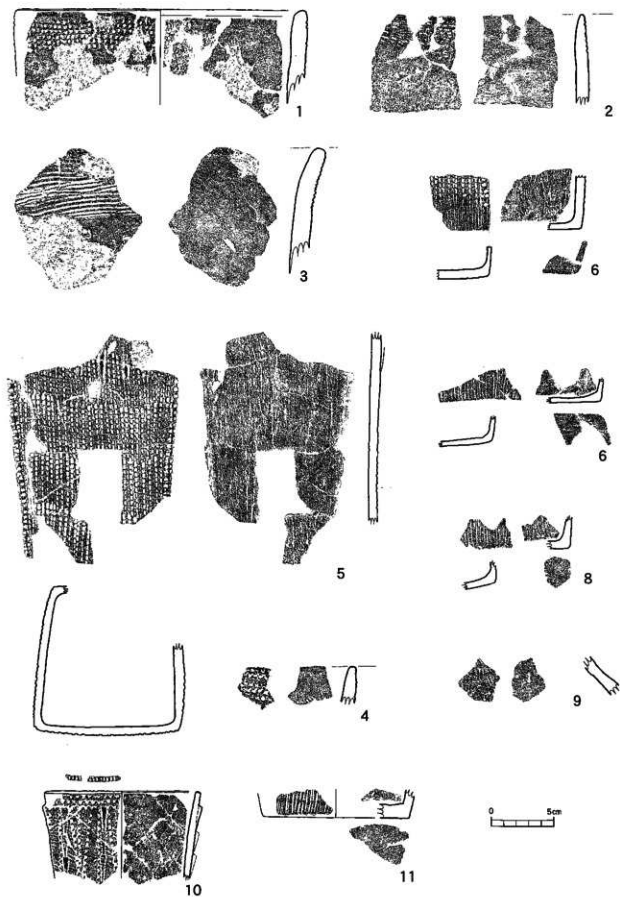
このようなことからⅦ層中の遺物とⅧ層中の遺物は時代差と考えられる違いが認められる。

その他にB区からは数少ない出土遺物の中に捺糸文の壺形土器が1点検出された。（19）

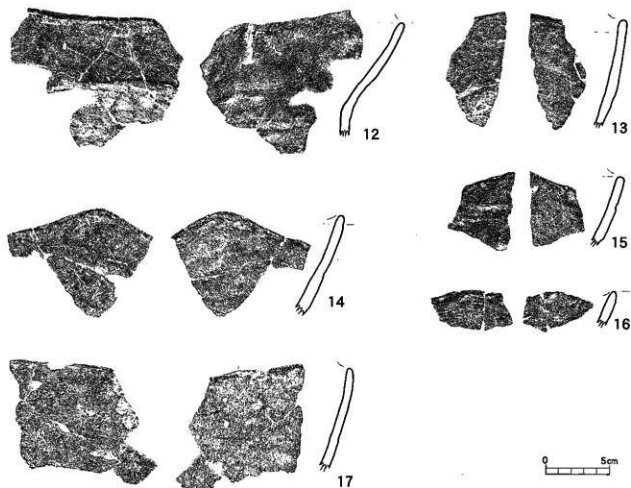
このように南九州各地で出土している貝殻条痕文系の土器の分布がこれまで調査例の少なかつたえびの市南部のこの地域でも認められた。

表1 遺物観察表(縄文土器)

番号	種別	出土地区及び 取上番号	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	文様・調整		色調		焼成	胎土	備考
								内面	外面	内面	外面			
1	縄文土器	A2-82, 135, 185, 186, 183	深鉢	口縁部	22.8			ナデ、スス付着、 風化著しい	ヨコナデ、ナデ、 貝殻縦線連続 突文	灰黄	灰	良好	無色透明・黒色の光沢粒、 0.5~2mmの灰白・灰褐色 粒を含む	
2	縄文土器	A-390, 391	深鉢	口縁部				ナデ	ヨコナデ、横位 の工具による刺 突文	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	良好	0.5~1.5mmの灰白、褐色 の粒を含む	
3	縄文土器	A1-526	深鉢	口縁部 ~胴部				ケズリの後ナデ、 スス付着	ナデ、横位の貝 殻条痕文	浅黄	にぶい 黄橙	良好	5mm以下の灰・乳白色の 粒、3mm以下の赤褐色の 粒、2mm以下の透明光沢 粒を含む	
4	縄文土器	A1-440	深鉢	口縁部				ナデ	ナデ	橙	にぶい 橙	良好	1mm以下の乳白色・赤褐 色の粒、微細な光沢粒を 含む	
5	縄文土器	A1-GT, 202, 203, 204, 215, 313, 319, 321, 518, 521, 522, 523, 529, 609	深鉢	胴部				ケズリ	貝殻縦線による 縦位の連続刺突 文、板形突帯	にぶい 黄橙	灰黄褐	良好	2mm以下の透明光沢粒、 1mm以下の黒色光沢粒・ 浅黄色粒を含む	角筒
6	縄文土器	A-618	深鉢	底部				ケズリの後ナデ	貝殻縦線条痕の 後ナデ、縦位の 刻目	黒褐	にぶい 黄橙	良好	1mm以下の茶褐色・乳白 色の粒を多く含む	角筒
7	縄文土器	A-613	深鉢	底部					縦位の刻線	にぶい 黒	にぶい 黄橙	良好	1mm以下の茶褐色・黒褐 色の粒を多く含む	角筒
8	縄文土器	A-212	深鉢	底部				ナデ	縦位の刻線	橙、 褐灰	にぶい 黄橙	良好	1mm以下の茶褐色の粒 を多く含む。黒色・白色の 光沢粒を含む。	角筒
9	縄文土器	B-5	壺	胴部				横方向のナデ	熱赤文	にぶい 褐	橙	良好	3mm以下の乳白色粒、 2mm以下の茶褐色粒を 含む	
10	縄文土器	A1-343, 428	深鉢	口縁部 ~胴部	12.4			ケズリの上をミ ガキ、横方向に ヘラミガキ	口唇部に浅い押 圧刻目、横方向 に貝殻縦線刺突 縷文、2段の楔 状突帯	にぶい 黄橙、 灰黄褐	にぶい 黄橙	良好	透明・半透明・黒色の光沢 粒、微細~2mmの灰白・ 灰褐色の粒を含む	円筒
11	縄文土器	A1-604	深鉢	底部	11.6			ヘラ工具による ナデ	工具による縦位 の刻目	にぶい 褐、 黄灰	にぶい 褐	良好	少量の半透明粒、微細~ 1mm大の灰白・褐色の粒 を含む	円筒
12	縄文土器	A1-542, 297, 619, 298, 196 643	深鉢	口縁部 ~頸部				指頭痕、ヨコナ デ	ナデ、ヨコナデ、 全体にスス付着	にぶい 黄橙、 灰黄褐	橙	良好	1mm以下の茶褐色・黒褐 色の粒を多く含む。黒色光 沢粒を少量含む	
13	縄文土器	A1-547	深鉢	口縁部				斜方向の粗いヨ コナデ	ヨコナデ、斜方 向のナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄褐	良好	1mm以下の白色光沢粒・ 黒色粒を含む。	波状 口縁
14	縄文土器	A1-545, 41, 96	深鉢	口縁部				ナデ	ナデ、スス付着	にぶい 黄橙、 褐灰	にぶい 黄橙	良好	1mm以下の灰褐色・黒褐 色の粒を多く含む。黒色光 沢粒を少量含む	波状 口縁
15	縄文土器	A1-546	深鉢	口縁部				斜方向のナデ	斜方向のナデ	にぶい 黄褐	にぶい 黄橙	良好	微細な白色透明光沢粒、 白色粒を含む	波状 口縁
16	縄文土器	A1-177, 538	深鉢	口縁部				ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい 黄褐	にぶい 黄橙	良好	微細な白色透明光沢粒、 白色粒を含む	波状 口縁
17	縄文土器	SA1, SA1-40	深鉢	口縁部				ヨコナデ	ヨコナデ、スス 付着	にぶい 黄橙	明黄褐	良好	1mm以下の白色粒を含 む。	波状 口縁



第8圖 縄文土器実測圖1 (S-1/3)



第9図 縄文土器実測図2 (s=1/3)

②縄文時代の石器

縄文早期の土器が出土した第Ⅶ層から黒曜石を中心とした石器類が出土している。打製石鏃が最も多いが石核や剥片類も出土している。A1区・A2区両方から出土しているが、特にA1区の東側で多く出土している。特徴的なのは石器とともに、半製品や製作に失敗したのではないと思われる歪なもの、石器を製作したときに飛び散ったと思われる多量の微細なチップなどが出土したことである。またこれらの石片と共に台石が数点出土した。これらの状況から当時ここで石器の製作を行っていたのではないかと推察される。柗野第1遺跡の北西に位置する浜川原遺跡でも石器製作の跡がえびの市教育委員会が行った調査で確認されている。

石器の大半は黒曜石製で、柗野第1遺跡の近くの桑ノ木津留で産出したと思われる褐色透明で気泡の混入の少ない黒曜石が使われている。

石器を種別に分類した中で数が最も多かったのは打製石鏃で21点が出土している。これらは全て無茎鏃であるが、基部の形状により次の3点に分類できる。

- | | | | |
|---|-----|---------------|-------------------------------------|
| A | I類 | 窪みが明瞭なもの | 5点 (34, 35, 37, 38, 39) |
| | II類 | 窪みが僅かに認められるもの | 8点 (26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33) |

基部形状で分類

I類	窪みが明瞭なもの	5点 (34, 35, 37, 38, 39)
II類	窪みが僅かに認められるもの	8点 (26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33)
III類	窪みが無いもの	8点 (18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25)

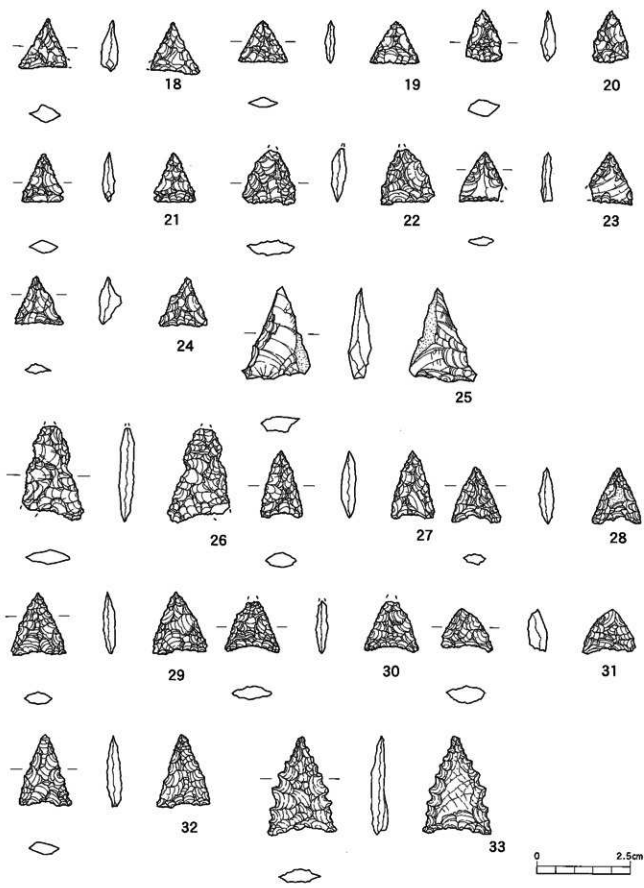
これらの石鏃は、33(石英製)を除いて全て桑ノ木津留産と思われる黒曜石製である。なお最大長を比較すると、その半数近くが1.0cm以上1.5cm未満のものであり、1.5cm以上2.0cm未満は27%、2.0cm以上が18%、その他不明のもの10%であった。このうち最小値は35の1.0cm、最大値は33の2.8cmであった。

これらのことから、当遺跡の打製石鏃については、黒曜石製で2cm未満、基部の窪みがあまり見られないという特徴を持ったものが多いことが分かる。黒曜石は、えびの市北部と鹿児島県大口市との境付近にある桑ノ木津留で産出するものが使用されている。桑ノ木津留は、本遺跡から直線距離にして約10kmで、距離的に近く入手しやすかったものと思われる。長さ2cm以上のものは僅かに4点で、その内の1点が石英製である。これらの打製石鏃は知覧式土器などと同じ土層から出土している。

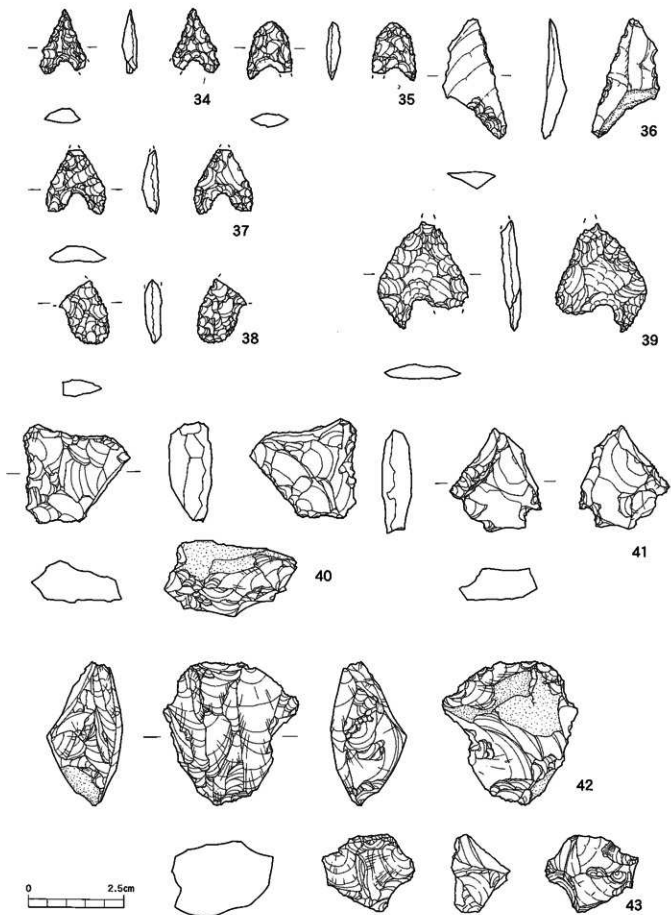
打製石鏃以外のものは器種により分類した

I類	石核	6点 (42, 43, 44, 46, 47, 48)
II類	楔形石器	1点 (54)
III類	剥片	6点 (49, 50, 51, 52, 53, 55)
IV類	スクレイパー	1点 (60)
V類	打製石鏃未加工品	1点 (45)
VI類	二次加工品	2点 (40, 41)
VII類	原石	4点 (56, 57, 58, 59)
VIII類	台石	3点 (71, 72, 73)
IX類	敲石・磨石	7点 (62, 63, 65, 66, 67, 68, 69)
X類	石斧	1点 (74)

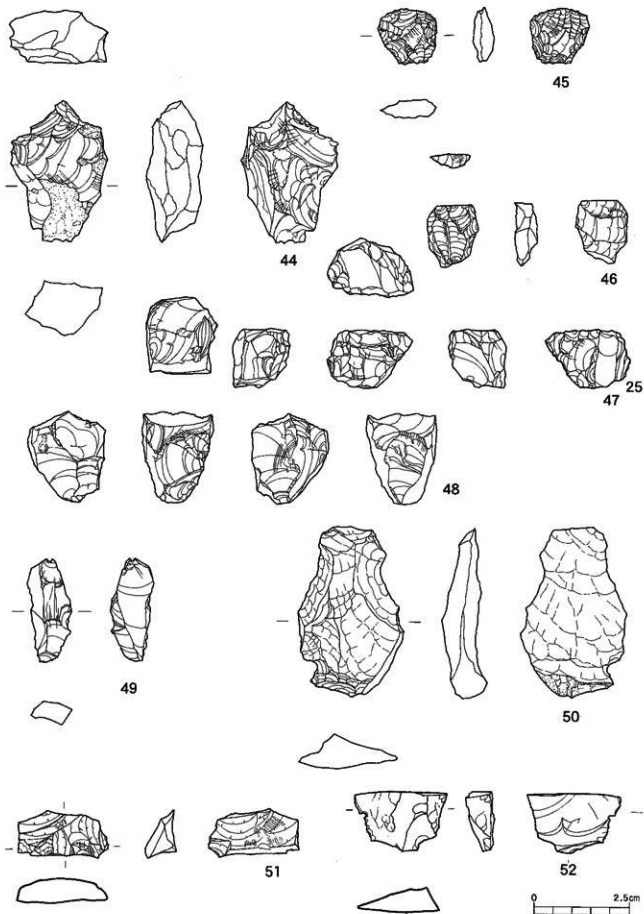
原石や打製石鏃未加工品・二次加工品などが出土していることや、礫の分布状況を見ると所々に集中して出土する場所があり石器製作を行った可能性がある。



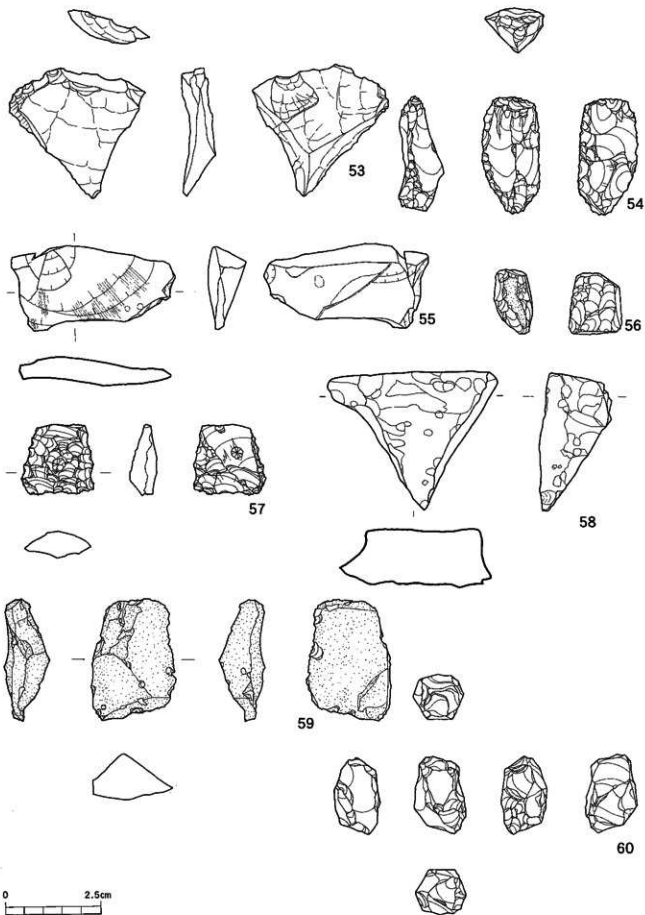
第10図 縄文時代の石器実測図1 (S=1/1)



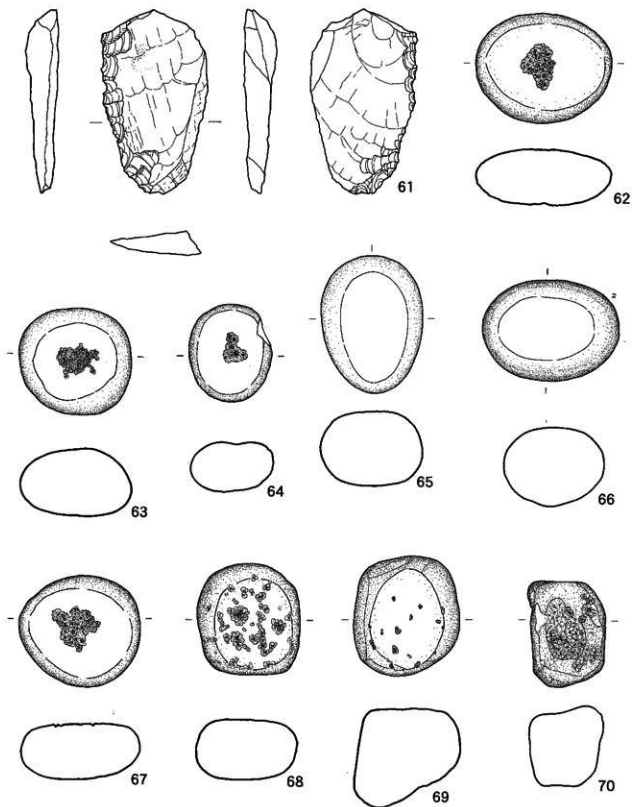
第11図 縄文時代の石器実測図2 (S=1/1)



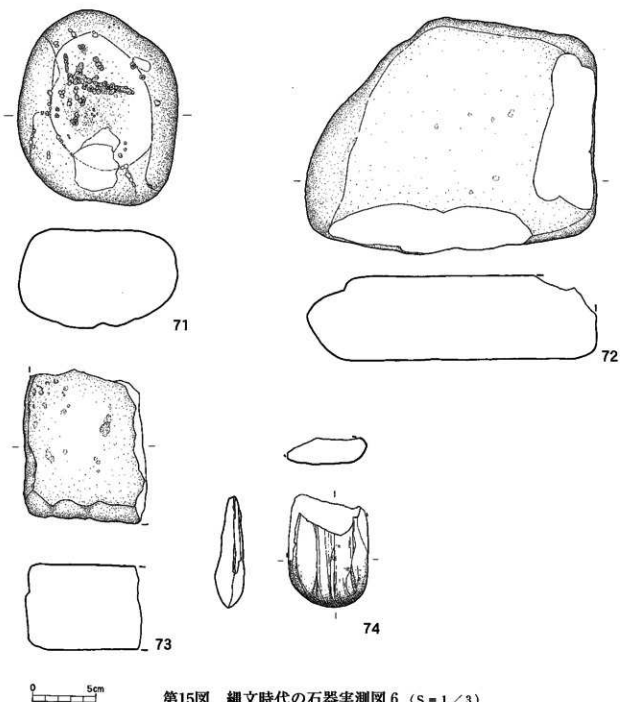
第12図 縄文時代の石器実測図3 (S=1/1)



第13図 縄文時代の石器実測図4 (S=1/1)



第14図 縄文時代の石器実測図5 (S-1/3)



第15図 縄文時代の石器実測図6 (S-1/3)

表2 石器計測表

番号	出土地区及び 取上番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
18	A1-181	打製石鏃	1.30	1.20	0.40	1.5	黒曜石	桑ノ木津留産
19	A1-199	打製石鏃	1.10	1.20	0.20	1.1	黒曜石	桑ノ木津留産
20	A1-366	打製石鏃	1.30	0.90	0.40	1.3	黒曜石	桑ノ木津留産
21	A1-395	打製石鏃	1.30	1.00	0.30	0.8	黒曜石	桑ノ木津留産
22	A1-486	打製石鏃	1.40	1.40	0.40	1.8	黒曜石	桑ノ木津留産
23	A1-543	打製石鏃	1.30	1.00	0.20	0.8	黒曜石	桑ノ木津留産

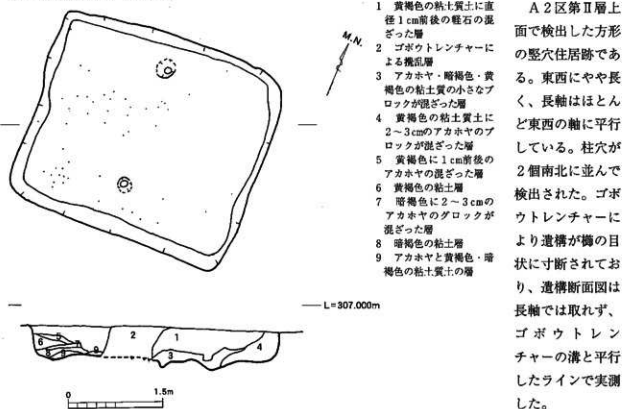
番号	出土地区及び 取上番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
24	A1-498	打製石鏃	1.20	1.30	0.60	1.2	黒曜石	桑ノ木津留産
25	A1-480	打製石鏃	2.40	1.80	0.60	3.0	黒曜石	桑ノ木津留産
26	A1-345	打製石鏃	2.30	1.50	0.40	2.4	黒曜石	桑ノ木津留産
27	A1-424	打製石鏃	1.80	1.10	0.40	1.3	黒曜石	桑ノ木津留産
28	A1-520	打製石鏃	1.50	1.30	0.40	1.3	黒曜石	桑ノ木津留産
29	A1-570	打製石鏃	1.70	1.40	0.30	1.5	黒曜石	桑ノ木津留産
30	A2-97	打製石鏃	1.40	1.50	0.30	1.1	黒曜石	桑ノ木津留産
31	A2-109	打製石鏃	1.00	1.30	0.50	1.2	黒曜石	桑ノ木津留産
32	A2-172	打製石鏃	1.90	1.40	0.30	1.5	黒曜石	桑ノ木津留産
33	A2-178	打製石鏃	2.60	1.70	0.40	2.4	石英	
34	A1-155	打製石鏃	1.60	1.20	0.30	1.8	黒曜石	桑ノ木津留産
35	A1-168	打製石鏃	1.40	1.20	0.30	1.4	黒曜石	桑ノ木津留産
36	A2-176	打製石鏃	1.60	2.50	0.60	1.9	黒曜石	桑ノ木津留産
37	A1-429	打製石鏃	1.60	1.60	0.40	1.8	黒曜石	桑ノ木津留産
38	A1-214	打製石鏃	1.50	1.10	0.40	1.1	黒曜石	桑ノ木津留産
39	A2-96	打製石鏃	2.80	2.30	0.30	3.0	黒曜石	桑ノ木津留産
40	A1-156	二次加工品	2.50	2.80	0.30	3.2	黒曜石	桑ノ木津留産
41	A1-431	二次加工品	2.70	2.40	0.80	2.7	黒曜石	桑ノ木津留産
42	A1-437	石核	3.80	3.50	1.80	5.1	黒曜石	桑ノ木津留産
43	A1-517	石核	2.30	2.40	1.60	4.2	黒曜石	桑ノ木津留産
44	A1-495	石核	3.80	2.60	1.40	2.9	黒曜石	桑ノ木津留産
45	A2-203	石鏃未加工品	1.60	1.50	0.50	1.3	黒曜石	桑ノ木津留産
46	A2-110	石核	1.60	1.30	0.40	1.5	黒曜石	桑ノ木津留産
47	A1-222	石核	2.30	1.60	1.50	2.2	黒曜石	桑ノ木津留産
48	A1-499	石核	2.50	1.90	2.00	2.9	黒曜石	桑ノ木津留産
49	A1-358	剥片	2.70	1.00	0.60	1.9	黒曜石	桑ノ木津留産
50	B-1	剥片	4.40	2.70	0.90	3.8	黒曜石	桑ノ木津留産
51	A2-80	剥片	1.30	2.40	6.50	1.7	黒曜石	桑ノ木津留産
52	A2-176	剥片	1.60	2.45	0.70	2.1	黒曜石	桑ノ木津留産
53	A1-575	剥片	3.30	3.20	0.70	3.2	黒曜石	桑ノ木津留産
54	A1-268	楔形石器	3.10	1.50	1.20	2.0	黒曜石	桑ノ木津留産
55	A1-383	剥片	4.35	1.00	0.60	7.5	黒曜石	桑ノ木津留産
56	A1-240	原石	1.70	1.30	1.10	2.9	黒曜石	桑ノ木津留産
57	A1-324	打製石鏃	1.80	1.90	0.70	1.5	黒曜石	桑ノ木津留産
58	A1-243	原石	3.60	4.50	1.90	18.7	黒曜石	桑ノ木津留産
59	A1-243	原石	3.60	4.30	1.60	5.9	黒曜石	桑ノ木津留産

番号	出土地区及び 取上番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
61	A1-GT	スクレイパー	4.80	2.80	0.70	63	黒曜石	桑ノ木津留産
62	A2-107	敲石	8.60	10.75	4.40	486	安山岩	
63	A1-470	敲石	8.35	8.95	5.40	574	砂岩	
64	A1-593	凹石	7.70	6.60	4.00	220	安山岩	
65	A1-528	磨石	10.80	8.00	5.90	718	砂岩	
66	A1-397	磨石	10.07	8.00	6.25	580	安山岩	
67	A2-149	敲石	8.70	9.60	4.40	452	安山岩	
68	A2-144	敲石	8.70	8.15	4.80	524	安山岩	
69	A2-193	磨石	9.40	8.45	8.40	800	安山岩	
70	A2-196	石皿	8.30	6.20	6.40	420	砂岩	
71	A1-59	石皿	15.50	12.50	7.95	1,540	砂岩	
72	A1-534	台石	24.50	30.90	9.00	12,000	安山岩	
73	A1-631	台石	12.20	9.70	6.80	1,590	安山岩	
74	A1-273	石斧	9.20	6.30	2.30	159	流紋岩	

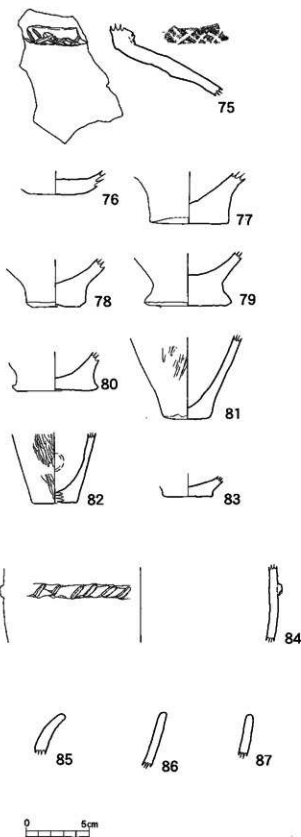
第2節 弥生時代の遺構と遺物

(1) 遺構

① 1号竪穴住居跡 (SA1)



第16図 竪穴住居跡実測図 (S=1/60)



第17図 弥生土器実測図 (S=1/3)

また、これに直交する断面はトレンチャーによる攪乱が激しく断面実測のために残っていたベルトが崩落したため実測出来なかった。遺構面からの掘り込みは約20cmで、埋土は凹レンズ状に堆積しており住居が廃棄された後、自然に埋まっていたものと思われる。

住居跡内の床面に近い所から弥生時代のミニチュア土器が出土している事からこの住居跡は弥生時代のものと思われる。住居内より縄文時代の土器片も出土しているが、これはトレンチャーにより住居跡より下層の遺物が掻き上げられたものと思われる。

調査区内からは1軒しか検出されなかったが、幅10m足らずの調査区であり、地形を考えると調査区外にも他の住居跡がある可能性がある。

(2) 遺物

①土器

弥生時代の遺物は第Ⅲ層を中心に出土した。点数的にはかなり多かったが、弥生時代の遺物包含層はゴボウトレンチャーにより縦横に掘り込まれており、粉碎された土器片が土層の攪乱した状態で出土したものが大部分である。観察表にはトレンチャーの影響を免れたもので、ある程度の大きさを保ったものを掲載した。器種としては鉢、甕、壺、ミニチュア土器が出土している。

表3 遺物観察表(弥生土器)

番号	種別	出土地区及び取上番号	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	文様・調整		色調		焼成	胎土	備考
								内面	外面	内面	外面			
75	弥生土器	A2-61,64	壺	胴部~ 頸部				ナデ、ヨコナデ、 風化が見られる	貼付刻目突帯、 斜方向にミガキ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	良好	微細な白色光沢粒、黒色粒	
76	弥生土器	A-84	壺?	底部			4.5	工具によるナデ	粗いナデ、工具 によるナデ	浅黄、 灰	浅黄、 黄灰	良好	半透明・黒色の細片、 微細~1mmの灰白・灰 褐色粒を含む	
77	弥生土器	A1-6	壺	底部			6.1	粗いナデ、工具 痕	斜方向の粗いナ デ、ヘラによる ナデ	灰黄、 褐	灰黄、 灰褐	良好	半透明の粒、白色光沢 粒、微細~1.5mm大の 灰白・灰・灰褐色の粒	
78	弥生土器	A1-112	鉢	底部			4.6	ナデ、風化気味	ヨコナデ、風化 気味	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	良好	2mm程度の黒色粒、白 色光沢粒	
79	弥生土器	A1-35	鉢	底部			6	ナデ	ナデ、底面は風 化著しい	にぶい 黄橙	明黄褐	良好	微細な白色光沢粒、黒 色粒、乳白色粒	
80	弥生土器	A1-GT	鉢	底部			6.2	ナデ、一部黒変	ナデ、底面は風 化著しい	にぶい 黄橙	にぶい 橙	良好	5mm程度の灰色の粒、 1mm以下の白色粒	
81	弥生土器	SAI-2	ミニ チュア 土器	胴部~ 底部			3.7	横方向のナデ、 風化気味	斜方向のミガキ、 風化気味	橙	橙	良好	2mm以下の乳白色粒、 1mm以下の赤褐色粒、 微細な光沢粒を含む	
82	弥生土器	A1-GT	ミニ チュア 土器	胴部~ 底部			3.5	指頭痕、ナデ	斜方向のミガキ	にぶい 黄橙	橙	良好	1.5mm以下の乳白色粒・ 黒色粒・田井台色粒、 微細な光沢粒を含む	
83	弥生土器	A1-GT	ミニ チュア 土器	底部			4.0	ナデ	ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	良好	微細な乳白色粒、光沢 粒	
84	弥生土器	A1-115	壺	胴部				ナデ、部分的に 風化	斜方向の刻目突 帯、ナデ	にぶい 黄橙、 灰白	にぶい 黄橙、	良好	0.1~2mm大の灰・灰 褐・褐色の砂粒	
85	弥生土器	A-216	鉢	口縁部				ヨコナデ	粗いナデ	にぶい 黄橙	橙	良好	2mm以下の茶褐色・灰 褐色粒を含む	
86	弥生土器	112	壺	口縁部				ナデ	ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	良好	3mmの黒褐色粒、灰褐 色粒を多く含む	
87	弥生土器	A1-169	壺	口縁部				ナデ	ナデ	浅黄	にぶい 黄橙	良好	1mm前後の灰褐色・茶 褐色の粒を多く含む。	

②石器

石器についても攪乱・削平により数量的に多くないが、台石が2点出土している。

表4 石器計測表2

番号	出土地区及び 取上番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
88	A2-147	台石	14.90	14.90	6.30	1,590	砂岩	
89	A2-116	台石	7.35	6.25	3.50	179	砂岩	

第3節 自然科学分析

自然科学分析については株式会社古環境研究所に依頼して火山灰の分析を行った。

以下はその結果の抜粋である。

九州地方えびの市域に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、霧島、始良、鬼界など多くの火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになってきている。

そこで、年代の不明な集石遺構や土層が検出されたえびの市終野第1遺跡においても、地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、採取された試料を対象にテフラ検出分析と屈折率測定を行って示標テフラの層位を把握し、遺構や土層の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、A区東端深掘地点、A区No.3-4杭間集石地点、B区西壁の3地点である。

採取した試料を、地質調査、テフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、下位より、白鳥岳火山起源の溶岩流、終野第1テフラ（Fk-1、仮称）、終野第2テフラ（Fk-2、仮称）、終野第3テフラ（Fk-3、仮称）、桜島薩摩テフラ（Sz-S、約1.1万年前*1）、霧島牛ノ脛テフラ下部（USL、約6,300～6,500年前*1）、鬼界アカホヤ火山灰（約6,300年前*1）などの示標テフラおよびその降灰層準を検出することができた。発掘調査により検出された集石遺構の層位は、USLの下位にあると考えられる。

第4節 まとめ

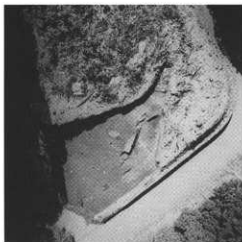
終野第1遺跡は、道路建設予定地の調査であり、幅10m程の細長い調査区であったが、弥生時代の住居跡、縄文時代早期の土坑や集石遺構を検出することができた。遺物も貝殻条痕文系の土器が出土し、この土器を有する文化圏がこの地域まで及んでいることが確認された。また、黒曜石製の石鏃を中心とした石器が検出され、同時に多数の黒曜石のチップが確認されたことから、石器製作跡の存在も推測できた。これらのことから、住居跡は発見されなかったが、当時の人々が本遺跡周辺で生活していたことが窺える内容であった。

えびの市では各種開発に伴う調査等でいろいろな時代の遺構・遺物が検出されているが、これまでの事例ではアカホヤ火山灰の下の縄文時代早期にまで調査が及ぶことは少なかった。妙見遺跡・後平第2遺跡等の遺跡で縄文早期の遺物が出土しているが、この両遺跡を除くといずれも数点の土器片の出土に留まり、しかも妙見遺跡以外では押型文の土器のみで貝殻条痕文系の土器は検出されていない。さらに加久藤盆地の北側の九州山地から伸びる台地での調査がほとんどで、南側での調査による成果は灰塚遺跡の押型文の土器片3点のみであり、貝殻条痕文系の土器の検出はされていない。

このようなことから、今回本遺跡の調査で縄文時代早期の遺構・遺物を検出できたことは、えびの市における考古学的研究の一助となる資料を提供できたものと思う。



調査区全景



B区全景



A2区全景 (第XI層上面)



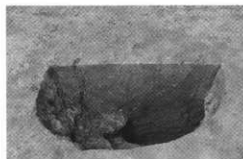
A区全景 (アカホヤ上面)



SA1完掘状況



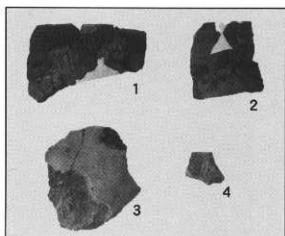
SI1検出状況



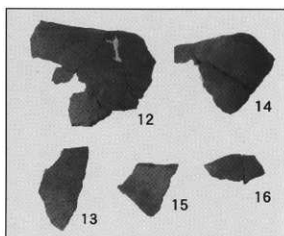
SC7半截状況



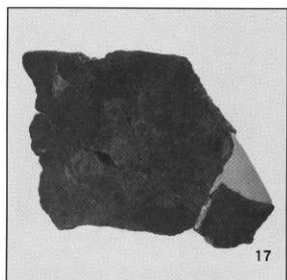
SC9完掘状況



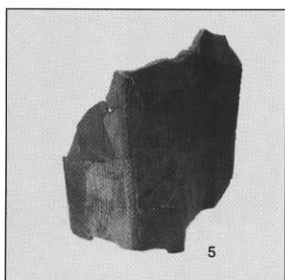
貝殻条痕文を持つ土器片



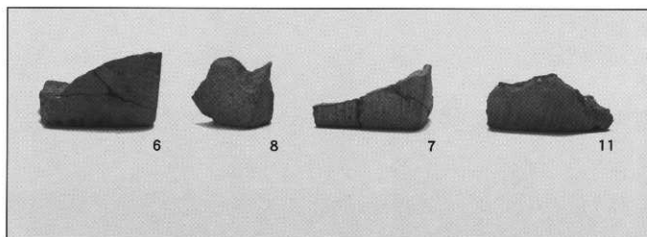
無紋の波状口縁を持つ土器片



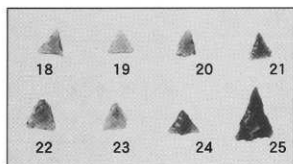
波状口縁を持つ土器片



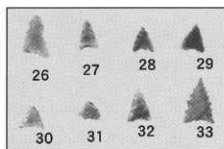
角筒土器胴部



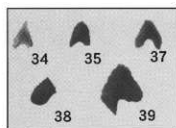
貝殻条痕文系土器の底部(円筒土器及び角筒土器)



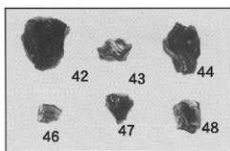
石鏃(Ⅲ類)



石鏃(Ⅱ類)



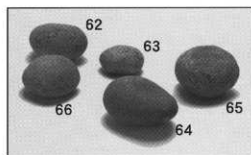
石鏃(Ⅰ類)



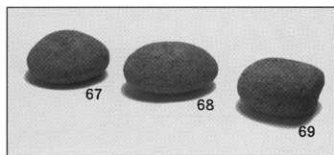
石核



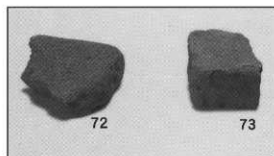
石斧



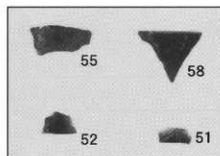
敲石・磨石 1



敲石・磨石 2



台石



剥片・原石

報告書抄録

ふりがな	ふきのだいいちいせき							
書名	柗野第1遺跡							
副書名	県営広域営農団地農道整備事業霧島北部2期地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第78集							
編集者名	柳田宏一							
編集機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒880-0212 宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地 TEL 0985-36-1171							
発行年月日	西暦2003年 月 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふきのだいいち 柗野第1 遺跡	宮崎県えびの市 大字東長江浦字中原 1482番地外	45209	3048	32度 5分 付近	132度 50分 付近	1999.12.7 ～ 2000.3.31	1,150m ²	県営広域 営農団地 農道整備 事業霧島 北部2期 地区に伴 う発掘調 査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物		特記事項	
柗野第1 遺跡	住居跡 散布地	縄文		土坑 集石遺構	打製石鏃・台石・磨石・敵 石・縄文土器			
		弥生		竪穴住居跡	弥生土器			

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第78集

柗野第1遺跡

県営広域営農団地農道整備事業霧島北部2期地区に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 平成15年10月17日

編集発行 宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212 宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地
TEL 0985-36-1171 FAX 0985-72-0660

印刷 田中印刷有限公司
〒880-0022 宮崎市大橋3丁目110番地
TEL 0985-28-4724 FAX 0985-20-9285